

奈良文化女子短期大学 幼小接続ワーキンググループ合同研究会
第51回 議事録

- 1 日 時 平成25年10月19日(土) 11:00~12:40
2 場 所 奈良文化女子短期大学 本館5階(504教室)
3 参加者 7名
うち 本学事務局 5名

4 内 容

- (1) 本年度のテーマ「言葉の力の育成と幼小接続」について、本学の恒岡宗司講師によるミニ講話

<概要>

- ・新制度における幼保連携型認定こども園の認可においては、3歳以上に保育と学校教育、3歳以下は保育を提供すると記載されている。3歳以下では教育は不要と誤って捉えられることが危惧される。今後は3歳児段階の接続問題も関心を集めるのではないか。
- ・子どもの言葉の問題は親の言語文化と深く関係しており、幼保小の接続だけで解決できる問題ではない。むしろ言葉の育成の問題のなかに幼保小接続があると捉えたほうがよいのではないか。
- ・言葉は語彙を増やすことが目的ではない。幼児期から小学生の時期は、実物や体験と結びついた適切な言葉(例えば味覚を細やかにあらわす言葉)や、自分の心を伝える言葉、相手の心を知る言葉をいかに身につけさせるかが重要。そのために家庭とどのように連携していけるかが大きな課題。
- ・中京大学の鯨岡俊先生は、個としての能力の発達よりも「関係発達」が大切であると主張している。言葉の力は人との関係において育つものであり、言葉を育てるということは心を育てることである。つまり思いやりの心を育てるための幼小接続が大切と考える。

(2) グループによる話し合い

(参加の先生)

- ・言葉の育成においてTVなどマスコミの影響力と教育の力では、どちらが勝っていると感じられるか。②言葉の教育の大切さについて、親と問題意識をどのくらい共有できているか。
- ・最近では「じぇじぇ」が音の楽しさもあり、よく聞かれる。言葉で気持ちを上手に表現できず、もう一言が足りず手が出てしまう子どもがいる。小学校でも言葉による大人の仲裁が必要になってきている。教師の言葉づかいはそのまま子どもに伝わるので、「俺」を使用していた学生サポーターに注意したことがある。授業中の話し合いの場面で「公的」を意識して児童を「さん」づけで指名する教師もいれば、名前で指名する教師もいる。小学校でも「公的」を意識させることが

大事なのではと考えている。親への直接的な指導は難しいので、親子で参加できる活動の設定などを通して、コミュニケーションの大切さを伝えていきたい。

- ・3～4歳ぐらいではマスコミの影響で不適切な言葉を覚えても、その後の教育や環境によって自然に戻るのではないだろうか。乱暴な言葉づかいをする家庭の子どもは、乱暴な言葉は治りにくい。乱暴な言葉をなくす努力よりも、正しい言葉をしっかりと教えていくことが大切ではないだろうか。
- ・以前は子どもは、親が電話で「公的」な言葉づかいで話すのを自然に聞いていた。今では親もメールやラインでのやりとりが中心になってしまった。公的な言葉づかいや敬語などの基本の型は、やはり教育していくべきである。民間企業が学生に求める能力は、1番が「コミュニケーション能力」、2番が「熱意」となっている。つまり、相手の事情を理解して正しく問題を提起し、解決しようとする能力のことであり、人との関係性への能力といえる。日本語の語彙の多さは日本の細やかな技術力と関連している。国際競争力の観点からも、外国語の習得よりもまずは国語力であると考えられる。

(3)「言葉と保育所・幼稚園・こども園の力と保護者・社会の影響」を話し合っ ての感想

- ・幼児期から正しい言葉を使う場面をもつことで、正しい言葉が身につく、たとえ悪い言葉を覚えたとしても最終的にパブリックの場面で使えるようにすべきです。その場面として園や学校の役割が大きいと思います。しかしあまり小さい年齢で行うと言葉を閉ざしてしまうこともあると思うので、子どもを強制するより普段の大人の姿だと思います。
- ・多様な人との出会いや感動が生まれる場を意図的、計画的に設定し、そこでの会話が豊かになるようなしなやかな教育の場で行うことが必要であると思いました。
- ・日常的には絵本や小説などの読み聞かせや読書ができる機会を増やし、美しい表現や多様な表現に出会うよう、教育現場の環境づくりを心がけたいです。
- ・今日は言葉の大切さを改めて考えさせられました。子どもの将来のために教育現場の果たす役割の大きさを意識して取り組みたいと思います。

5 次回の予定

平成 25 年 11 月 16 日（土） 11:00～12:30